

## [社 会]

## 思考力を育む歴史資料の活用について

- 歴史資料を用いて導く子どもの思考 -

荒井 隆浩\*

## 1 研究の目的

小学校の社会科では、民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養うことを教科の目標としている。公民的資質について松岡（2005）は、「民主的、平和的な国家・社会の形成者としての自覚をもち、自他の人格を互いに尊重し合うこと、社会的義務や責任を果たそうとすること、社会生活の様々な場面で多面的に考えたり公正に判断したりすることなどの態度や能力」<sup>1)</sup>と定義付けている。そして、公民的資質を養うために、社会的なものの見方や考え方を育てること、すなわち社会的な思考力・判断力を育てることが必要であると説いている。社会的な思考力・判断力について、同じく松岡は、「社会的事象についての知識を単に積み重ねていくのではなく、社会的事象の意味を他と比較したり、因果関係を明らかにしたり、また、それと自分とのかかわりなどについて考えたり、判断したりする能力」<sup>2)</sup>としている。

この社会的な思考力・判断力を育てるために多くの実践が行われている。近年においては、松岡（2005）が歴史的事象の多い旧城下町・高田（上越市）の地域素材に着目し、対話を手立ての核とした学習課題を設定している。また、池田（2006）は「社会的な思考力や判断力は社会的事象に関わる一人一人が得た情報を、整理、比較、検討、交流という学習の過程を培われなければならない」<sup>3)</sup>として地域のスーパーマーケットを題材とし、体験に基づいた学習課題を設定した。ほかにも、西塚（2007）は既存の知識や学習を通して得た気づき、発見をノートに工夫して整理、比較、統合することにより、子どもたちの社会的な思考力を高めようと試み、地域の清掃工場を題材とした活動を展開している<sup>4)</sup>。

しかしながら、いずれも地域に存在する学習素材を取り上げており、とくに歴史単元においては、地域の素材を活用できない単元も多い。そこで、地域の素材が活用できない場合であっても、効果的に社会的な思考力・判断力を育てることができないだろうか考えた。

子どもたちの社会的な思考力・判断力を育てる手立てとして、松岡は「対話」を重視した。社会的事象を追求する子どもたちの学びには、学びを関係づけ、学びをつむぎ、創り変えていく構造が内在化されており、他者対話と自己内対話の手立てが相互に関わることにより、子どもの思考過程が質的に高まり、思考力そのものが育まれることである。

子どもたちに身近な地域素材でなくとも、歴史的事象に関する価値ある資料を提示し、その歴史的事象の背景や歴史的な人物の取組について「対話」を通して考え、その働きを評価する活動を実践することにより、子どもたちの社会的な思考力・判断力を育てることができるのではないかと考えた。

本実践では、その指導の在り方について明らかにしたい。

## 2 研究の仮説

歴史単元においては、歴史的事象に関する価値ある資料を提示し、その歴史的事象の背景や歴史的な人物の取組について「対話」を通して考え、その働きを評価する活動を実践することにより、子どもたちの社会的な思考力・判断力を育てることができる。

本単元であれば、元寇に関する多様な考え方を引き出す可能性のある資料をもとにして、なぜ元との戦いを北条時宗が決断するに至ったのかを、北条時宗の判断に焦点を当てて対話していくことで、子どもたちなりに、いろいろな立場や視点に立って元寇について考えていく姿＝社会的な思考力・判断力が育つ姿が表れる。

---

\* 上越市立大町小学校

### 3 研究の内容・方法

#### (1) 本単元の構成と位置づけ

##### ① 単元名

3「源頼朝と鎌倉幕府」より小単元「北条時宗の決断」

##### ② 目標

様々な資料や友達の見解を参考に、元寇に対する北条時宗の決断についての評価をしながら、当時の時代背景や現代への示唆などについて、自分の考えを深める。

##### ③ 単元でめざす子どもの思考する姿

元寇に関する資料や友達の見解などをもとにした自己内対話や他者対話を通して、当時の時代背景に気付き、とくに北条時宗の決断について、いろいろな視点から考えて評価していく姿

#### (2) 単元展開の構想

これまでに子どもたちは「3 源頼朝と鎌倉幕府」において、鎌倉時代についての学習を通して、武士の起源や源平の戦い、鎌倉幕府の成立とその仕組みについて学んでいる。次は「蒙古の大軍が攻めてくる（元寇）」である。

元寇については「執権・北条時宗は二度にわたる元の侵攻を暴風雨の助けもあって退けたが、これにより幕府の力が弱まっていった。」と、一面的にとらえられがちである。しかし、断固たる態度で国内の意見を統一した執権・北条時宗の決断、鎌倉武士の奮戦により日本を守ることができた事実、なぜ元は海を渡って日本に攻め寄せたのか？、超大国である元とどうしても戦わなくてはならなかったのか？という疑問、そして戦いが常にもたらす人々への禍など、現代にも多くの示唆を含む史実であり、過去の出来事に対する評価を行い、価値判断を経験するに相応しい話題ではないかと考えた。

本人の生活経験や自他の意見の違いだけでなく、元寇に関する歴史的資料など、様々な情報をもとにした自己内対話や他者対話を通して、鎌倉時代の背景に気付き、元と戦うことを決断した執権・北条時宗の考えについて、いろいろな視点から考えて評価していく姿を生み出したい。

### 4 実践の概要

#### (1) 単元計画

目標 (□) 学習活動 (・) ねらい (○)	子どもたちを対話に導く支援 (・) 評価 (●)
<p>〈思考の第一階層〉…自分の考えを明確にする □国書を無視した時宗の判断を評価しよう (1時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>文永の役のイラストや当時の世界地図から、気付いたことを話し合う</li> <li>元からの国書の内容を読み解く</li> <li>国書を無視して文永の役を招くことになる北条時宗の判断に対して評価する</li> </ul> <p>○文永の役 of イラストや元の国書などの資料から、元寇について自分なりの考えをもつ。</p>	<p>○自分なりの意見をもつ活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>文永の役のイラストや当時の世界地図について気付いたことを話し合い、元軍が有利な戦いであったことに気付く。：他者対話</li> <li>元からの国書について気付いたことを話し合い、友好を求めるようでも武力による脅しも含んでいる事実に気付く。：他者対話</li> <li>国書を無視して文永の役を招くことになる北条時宗の判断に対して、自分なりの意見をもつ。：自己内対話</li> </ul> <p>●資料をもとにして考えて、北条時宗の判断について、自分なりの意見をノートに書くことができる。</p>
<p>〈思考の第二階層〉…自分の考えを多面的に問い直す □断固とした時宗の判断を評価しよう (1時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>文永の役では圧倒的に元軍が有利であったことを確認する</li> <li>文永の役 of 戦禍や元寇防塁の資料から気付いたことを話し合う</li> <li>再びやって来た元の使者への時宗の対応とその結果について考え、評価する</li> </ul>	<p>○自分の考えを問い直させる活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>石塁などの準備を進めていたことや文永の役で侵攻を受けた対馬や壱岐・博多の戦禍、国内情勢についての資料も加え、北条時宗の断固たる態度が、弘安の役を招くことになったことについて自分の意見をもつ。 ：自己内対話→他者対話</li> <li>使者を切り捨てた北条時宗の判断について、友達と意見を交流する場をもち、自分の意見を相手に説明したり、相手の意見を聞いたりしながら、自分の意見を問い直す。：他者対話</li> </ul>

<p>○幕府の立場や武士の立場、戦禍を受けた民の立場などから、北条時宗の判断についての意見を問い直す。</p>	<p>●自分の意見を明確にして、補足するための資料を探したり、友達と意見を交流させたりしながら、自分の意見を問い直すことができる。</p>
<p>〈思考の第三階層〉… 本質を探りながら自分の考えを再構成する                  □断固とした態度をとり続けた北条時宗を評価しよう (1時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前次までの資料から考えたことを確認する</li> <li>・新たな資料から気付いたことを話し合う</li> </ul> <p>○元と戦うという決断に至った北条時宗について、時代背景なども考えながら評価し、いろいろな立場や視点から元寇についてとらえ直す。</p>	<p>○多面的な視野から社会的事象を判断する活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新たな資料（元の侵攻を受けた高麗の様子・弘安の役の軍船内の装備）や新たな視点も加えて考え、さらに話し合う。：他者対話</li> <li>・資料や友達の意見を参考にして、いろいろ視点から「元寇」について考え、自分の意見を再構成し、北条時宗の決断に対しての評価を行う。：自己内対話</li> </ul> <p>●多面的な視野から「元寇」について考え、自分の意見を再構成して、北条時宗の決断に対しての評価をすることができる。</p>

(2) 指導の実際

① 授業実施前

鎌倉時代を学習する前のアンケートでは、日本が元という国に攻められたことがあると知っている子どもは約半数であった。しかしながら、詳しく知っている子どもであっても、「その昔、元という国に攻められたが、ちょうど暴風雨が起きて日本が勝った。」という程度の知識でしかなかった。

② 一次…思考の第一階層を促す「自分なりの意見をもつ」ための活動の様子

○文永の役のイラストや当時の世界地図を提示して、気付いたことを対話する活動

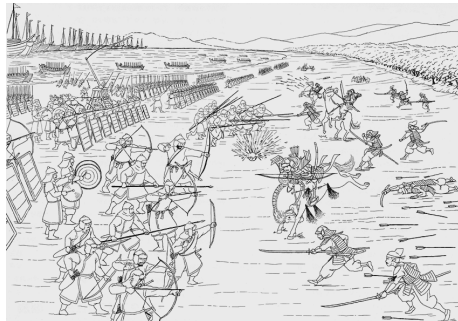


図1 文永の役のイラスト

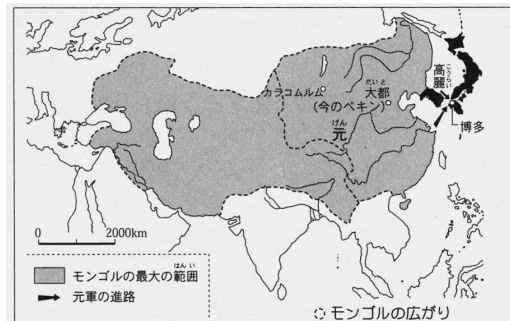


図2 元寇当時の世界地図

まず、文永の役のイラストや当時の世界地図を提示して、気が付いたことを話し合った。

集団戦法や火薬など近代兵器により元が有利に戦いを進めたこと。当時の元は世界的な大国であったこと。そして、小さな島国である日本に、元の大軍が攻め込んできた理由についての話し合いの際には、子どもたちの中からマルコポーロ『東方見聞録』の存在が挙げられ、「黄金の国」と考えられていたからという意見が出された。フビライにとっても日本は魅力的な国だったのだろうとし、さらに、当時の世界地図を見ながら「これだけ自分の領地が広がれば、(フビライは) 確実に世界征服したくなる。」といった意見も挙げられた。

○元からの国書を示し、その内容を読み解く活動

次に、元からの国書を示して内容を読み解く活動を行った。フビライは日本との友好を求めているのでは？ 攻め込むと脅しているのでは？ 「一つの家」というのは世界征服を考えているからでは？ …と、いろいろな意見が挙がったが多くの子どもは無礼な手紙であると感じた。「天からの命を受けた」「父とすることである」「軍を送ることになる」といった言葉が、フビライが友好を求めているとは感じられない理由としてあげられた。

しかし、最後にある「不宣」という一文が「命令ではない」という意味であることや、中国では友達に宛てる際の常套句であったことを紹介すると「フビライは一体どうしたいのか分からない。」といった声も挙がった。

本次では、超大国・元との戦いは国を滅ぼすかもしれない危険な戦いであるという視点、元からの国書は読み取り方でどのようにでも判断できるという視点、元が日本に興味をもつことになった視点などを引き出すことができた。また、日本側からの見方だけでなく、元側からの見方を引き出すこともできた。



(元からの国書…抜粋)  
 これから日本と大蒙古国とは、国と国の交わりをして仲良くしていこうではないか。我々は全ての国を一つの家と考えている。日本も我々を父と思うことである。このことが分からないと軍を送ることになるが、それは我々の好むところではない。  
 日本国王はこの気持ちを良く良く考えて返事をしてほしい。不宣

図3 元からの国書

授業の終わりに、国書を無視して文永の役を招くことになった北条時宗の判断を評価し、その理由をワークシートに記入させたところ、次のような結果となった。

⑤賛成9人-④7人-③中立4人-②2人-①反対1人

元からの国書を無視するという北条時宗の判断については、「時間を稼いで準備できる」と理由を挙げて賛成する子どももいたものの、多くは「勝ったのだから賛成」という意見にとどまっていた。また、中立・反対的な意見は「無視したから攻められたのだ」というものが主であった。

③ 二次…思考の第二階層を促す「自分の考えを問い直させる」活動の様子

○文永の役では圧倒的に元軍が有利であったことを確認する活動

まず最初に、文永の役では圧倒的に元が有利であったことを確認した。文永の役での元の目的は「おどし」であったという学説を子どもたちに伝えたのである。「元は暴風雨などにより撤収したけれども、「おどし」という当初の目的は達成していたと考えられています。だから、再び使者をすぐさま送ってきたのです。」と伝えたところ、子どもたちからは「日本は運が良かっただけだな。」「次は元も本気でくるだろう。」との声が聞かれた。

○資料から気付いたことを対話する活動（文永の役での戦禍・元寇防塁）

男は殺されるか生け捕りにされ、女は集められて船に結びつけられるか生け捕りにされた。一人として助かるものはない。壱岐島にしても同じ様子だ。  
 日蓮の書状より  
 「日蓮上人註画讃」

多くの立場から元寇について考えて欲しいと、資料を次々と示した。

文永の役での戦禍として、島民が皆殺しの目にあった対馬や壱岐島、一夜で炎上した博多の町の話をしたところ、「ひどい」「許せない」の声が挙がった。

それだけではなく、文永の役での元軍の死者が約13,000人と伝えたと「フビライの命令でやってきただけなのに…元の兵隊もかわいそうだ。」という声も聞かれた。

石塁（元寇防塁）については、配置図と現存する石塁、そして、石塁の大きさが感じられる資料を示したところ、子どもたちは、元が再び攻めてくることを予想して、幕府は迎え撃つ用意を進めていることに気が付いた。また、実際に戦う武士の立場から考えて

図4 文永の役での戦禍

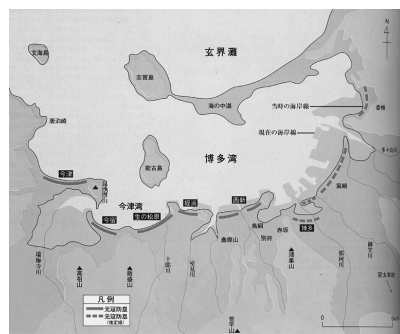


図5 元寇防塁（石塁）の配置図



図6 復元された石塁

「強い元と戦うのは嫌なのではないか?」「奉公だから仕方がない」「その分、後でたくさんご恩がもらえると期待していたのでは?」との意見が聞かれた。

さらに、長大な石塁を造る様子に思いを馳せ、これを実際に行ったのは武士だけではなく、そこに住む人人もだろうと想像することができた。その苦勞についても、「田んぼが作れなくて困る」「でも、命には代えられない」「文永の役で怖い目にあったから積極的に作ったかもしれない」と、農民たちの立場で考えていることが分かる発言が聞かれた。

今回は、元寇という歴史的な出来事について、北条時宗の立場、武士の立場、戦場となった人々の立場、さらには使者を斬られたフビライの立場や、元軍の被害を尋ねて元の兵隊の立場で考えている子どもの姿も見られるなど、いろいろな立場に立って考えることができた。

今回は、元寇という歴史的な出来事について、北条時宗の立場、武士の立場、戦場となった人々の立場、さらには使者を斬られたフビライの立場や、元軍の被害を尋ねて元の兵隊の立場で考えている子どもの姿も見られるなど、いろいろな立場に立って考えることができた。



図7 石墨の大きさが感じられる資料

るようになったのである。「前の戦いでひどい目にあったから気持ちは分かるけど…」という声も聞かれたが少数で、多くは否定的であった。

さらに、使者を斬り捨てたことにより、文永の役の5倍の戦力で攻められる弘安の役を招くことになったことを伝え、北条時宗の判断についての評価を求めたところ、以下ようになった。

⑤賛成0人-④0人-③中立1人-②7人-①反対15人

主な意見は、戦場となった人々の戦禍から考えた「平和が大切」「命を粗末にはいけない」という意見であった。もちろん、「戦争はよくないこと」「命は大切」であるということから考えると当然の結果である。しかし、三次では、これをさらに一步深めたいと考えた。

#### ④ 三次…思考の第三階層を促す「自分の意見を再構成する」活動の様子

##### ○前次までの資料から考えたことを確認する活動

元寇を招いた時宗への評価は「戦争＝絶対悪」のもと、予想されたものであった。北条時宗の判断について評価した理由を発表しながら、前次までを振り返った。そして、友達の意見を聞いても、その判断に変化がないことを確認した。

##### ○追加された新たな資料から気付いたことを対話する活動



図8 弘安の役での元軍の軍船装備



この年、蒙古兵が捕虜とした人間は男女あわせて261,800人にのぼり、殺されてしまった者は数えることができない。蒙古兵が通過した都市は、全て壊されてしまった。

当時の高麗の様子より

図9 高麗の現状など

北条時宗の決断について、最終的な判断をする上で、子どもたちの判断を揺さぶるだけの価値があると考えた資料を提示した。そして、新たな資料を見て気付いたことや考えたことや周りの友達と対話するように促した。

「2回目はおどしではなくて本気だったのか」「元からの国書では、元と高麗は父と子のように言っているが…、元の言うことはウソばかりだ」「もし、日本が負けていたらどうなっていたのだろうか?」と、子どもたちは、父子の関係であるはずの高麗が実は悲惨な状態であったことや、弘安の役が文永の役とは違って日本の占領を主な目的としたものであったことに、新たな資料から気付くことができた。また、もしも、その時日本が元に占領されていたとしたら今の自分たちの生活はどうなっていたのだろうか、現代の自分たちの生活にも思いを馳せることができた。そして、北条時宗も元のねらいを知っていたと仮定して、元と断固闘うとした北条時宗の判断について、三度、評価を求めた。

⑤賛成0人-④1人-③中立13人-②5人-①反対1人

「日本を守るために、時宗は最後の頑張りをしてくれたのだと思います。」「時宗はこうするしかなかったのかも。でも納得はいかない。最初から話し合いをするべきだった。」「結果として使者を切り捨てるしかないという判断に

なったのかも。よくない判断と分かっていたのだろうし、時宗もかわいそうな気がする。」「私が時宗なら同じ判断かも…でも、正しいとは言い切れない!」「時宗が守りたかったのは自分の地位だったのでは?農民は殺すなという命令もあるし、だとしたらやはり戦うのはおかしい。」

新たな資料の提示により、時宗の判断には、その時代の背景や様々な状況が含まれていることに気付くことができた。そして、賛成するにしても、反対するにしても、より幅広い視野やより多くの立場から北条時宗の判断を考えるようになった子どもたちの姿が見られた。

## 5 実践の成果と考察

本実践のねらいは、いろいろな立場や視点に立って元寇という歴史的な事象を評価することを通して、多面的な視野で物事を考える力＝社会的な思考力・判断力を育てることにあつた。

本実践では、多様な価値をもった資料の情報や、資料に対する解釈・考察が、北条時宗の決断に対する新たな評価の材料を生み出すことにつながった。とくに、資料に対する解釈・考察を他者対話と自己内対話の手立てが相互に関わるように展開を工夫したことにより、子どもの思考過程が質的な高まりを見せた。子どもたちの生活経験や自他の意見の違いだけではなく、新たな知識としての情報、即ち歴史資料を対話を通して活用することが、本実践のねらいである社会的な思考力・判断力を育てることに関わってくるものと考えられる。

## 6 今後の課題

本実践では、歴史的な事象について、人物の働きや代表的な出来事を評価する小単元を意図的に組み込んでいる。その中で子どもたちは、社会的な事象に対する認識を主体的に広げたり、人の生き方や営みの多様性を意識したりしている。しかし、各単元において、どの事象をいつ取り上げ、いかに意図的に小単元化して組み込むかが課題だと言える。本実践においても、ご恩と奉公という鎌倉幕府の在り方や御家人の生き方の変化をも北条時宗の評価の視点に入れるなら、元寇の事前・事中・事後という見通しをもった小単元構想が必要であると考えられる。

また、本実践は歴史単元にのみ範囲を限定しての取り組みであった。今後、地理単元や公民単元においても同様の活動により社会的な思考力・判断力を育てることができるかを明らかにしていくことが課題である。

## 参考文献

- 1) 2) 松岡貴徳「思考力を育てる社会科授業の想像」、『教育実践研究』No.15, 上越教育大学学校教育センター, 2005年, p.37
- 3) 池田岳康「社会的思考力を育成する社会科指導の展開」、『教育実践研究』No.16, 上越教育大学学校教育センター, 2006年, p.41
- 4) 西塚智行「社会的思考力を高める指導の工夫」、『教育実践研究』No.17, 上越教育大学学校教育センター, 2007年, p.31~36

## 資料出典

- 図1 有田和正『調べる力・考える力を鍛えるワーク』, 明治図書, 2002年, p.51
- 図2 有田和正『調べる力・考える力を鍛えるワーク』, 明治図書, 2002年, p.53
- 図3 『モンゴル国書写』 佐藤和彦・錦昭江編『図説・北条時宗の時代』, 河出書房新社, 2000年, p.81 訳文は筆者作成
- 図4 佐藤和彦・錦昭江編『図説・北条時宗の時代』, 河出書房新社, 2000年, p.82より筆者作成
- 図5 歴史群像シリーズ64「北条時宗～蒙古襲来と若き執権の果敢～」, 学習研究社, 2001年, p.41
- 図6 歴史群像シリーズ64「北条時宗～蒙古襲来と若き執権の果敢～」, 学習研究社, 2001年, p.40
- 図7 『蒙古襲来絵詞』中巻 歴史群像シリーズ64「北条時宗～蒙古襲来と若き執権の果敢～」, 学習研究社, 2001年, p.56
- 図8 (左)『朝日百科「日本の歴史」新訂増補』第4巻, 朝日新聞社, 2005年, p.263  
(右) 鷹島埋蔵文化財センター所蔵 松浦市教育委員会より提供
- 図9 『高麗史節要』 村井章介「時代概説17 軍旅と商旅」, 石ノ森章太郎『マンガ日本の歴史17』, 中央公論社, 1991年, p.210より筆者作成